

重陽の節句



9月9日は重陽の節句です。ご存知ない方も多いかもしれませんが、中国では奇数は縁起のよい陽の数とされ、一番大きな陽の数である9が重なる9月9日をおめでたい「重陽の節句」としていました。

1月7日の人日(じんじつ)の節句(七草)、3月3日の上巳の節句(桃の節句)、5月5日の端午の節句(菖蒲の節句)、7月7日の七夕(竹の節句)に続く5番目の節句がこの重陽の節句です。いずれも中国から伝わった行事が日本の生活文化や風習に合わせてアレンジされ、江戸時代に幕府がこの5つを「節句」として公的に定められました。

古代中国では、この日に香りの強い木の実を身に付けて山に登り、菊の花びらを浮かべたキク酒を酌み交わし、長寿と無病息災を願う風習がありました。キクは不老長寿の靈草と信じられていたのです。

それが日本に伝わると、平安時代には重陽節として宮中の大切な行事の一つとなりました。平安時代初期に天皇が中国の風習に倣い、宴を開いたり、菊の花を眺め、菊酒(菊の花を浮かべた酒)を飲んだり、詩を詠んだり(菊合わせ)して楽しみました。菊酒は、菊の花には不老長寿の力があるとされ、長寿を願うために飲んだようです。一緒に栗ご飯を食べる習慣があったことから、「栗の節句」と呼ばれることもあります。

キクは奈良時代に中国からもたらされ、後鳥羽上皇がこよなく愛したために、以来皇室の紋章にも使われています。皇族に限らずキクをデザインした家紋は164点あり(うち15点が皇族関係)、家紋にデザインされた植物の中で最も多くなっています。お気づきの方もいらっしゃるかも知れませんが、50円玉に描かれているのもキクの花です。今では日本人の花として私たちの生活には馴染み深い花ですが、渡来当時、人々は珍しくて美しいキクの花に夢中でした。

以降、キクはどの時代でも大変な人気で、とりわけ江戸時代においては品種改良が一気に進み、『花壇地錦抄』(1695年)という園芸書には251品種のキクが記載されているほどです。江戸時代には庶民の間にも菊酒を飲む風習が広がり、平安時代の雅な宴とは異なり、持ち寄ったキクの優劣を競ったりもしたようです。菊で人形を飾る菊人形作りなども行われるようになり、名所の単轄、駒込、染井辺りでは多くの客で賑わったそうです。現在でも9月9日に限らず、菊人形展や品評会は各地で行われています。

重陽の節句は9月9日であることから「重九(ちようく)」と呼ばれることもあります。またこの行事が宮中から民間に伝わると、

「お九日(おくにち)」と呼び、秋の収穫祭と習合し祝うようになりました。「長崎おくんち」(10月7-9日)、「唐津おくんち」(11月2-4日)などもその一例です。

このようにキクは日本文化に浸透したものの、重陽の節句の風習は明治以降急速に廃れていきました。5つの節句の中でも例外的といえるでしょう。なぜ廃れたのかは文化的なことなので察することしかできません。しかし、元々は旧暦の9月9日に行われた節句ですから、新暦でいうと10月に入ってからのことです。現在の9月9日にすると季咲きのキクを十分に楽しむのは、タイミングとして少し早いからかもしれません。

ちなみに、江戸時代に育種されたキクを古典ギクといい、主に次の4系統に分けられます。

- 江戸菊・・・開花するに従い花びらがねじれ、動きを見せるものがあります。
- 嵯峨菊・・・糸のように細い花弁が特徴的。色とりどりで、咲く花も花火のようです。
- 伊勢菊・・・現在の三重県松阪で発達したキク。細く縮れた花が垂れ下がって咲きます。
- 肥後菊・・・熊本で作られたキクで、主に一重の花です。清楚なたずまいがあります。

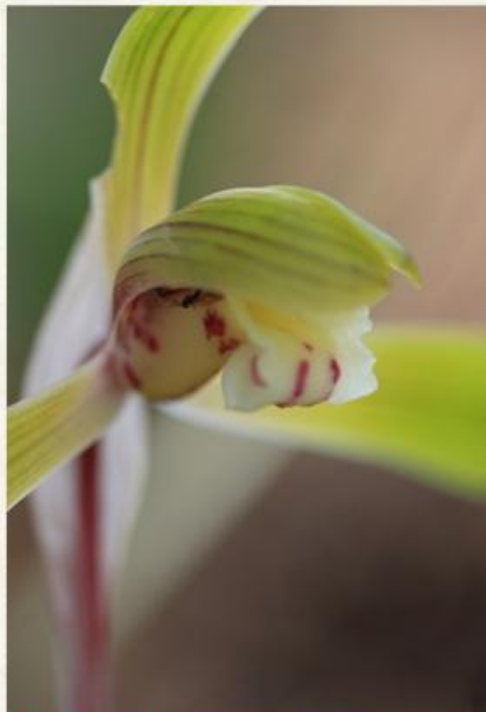
これらのうち切り花では嵯峨ギクの流通があります。また育種親として江戸菊を使う方もおり、まだまだ切花キクのバリエーションは増えそうです。



重陽の節句にお勧めのキク

ピンボンマム
キク "アナスタシア"シリーズ、グリーンシャムロックなど
2010年 大田市場花き部仲卸協同組合 青年部

敬老の日



9月の第3月曜日は敬老の日で、日本の国民の祝日の一つです。人生の先輩として長年に亘り社会や家庭のために働いてきたことに感謝して、高齢者を敬い、長寿を祝います。9月第3月曜日となったのは2003年で、それまでは毎年9月15日を敬老の日としていました。2001年の祝日法改正の適用により変更になりました。

敬老の日の始まり

敬老の日は戦後間もない1947年、兵庫県多可郡野間谷村（現在の多可町八千代区）で開催された敬老会に由来します。農閑期で、気候も良い9月中旬の15日を「老人を大切に、年寄りの知恵を借りて村作りをしよう」と「としよりの日」と定め、55歳以上の人を村の公会堂に招いてもてなしたそうです。これが3年後には兵庫県全域へ、更には4年後の1954年には全国区の催事となりました。「としよりの日」は「老人の日」と表記を改め、やがて1966年に国民の祝日法改正で、現在の「敬老の日」となったのです。

しかし、敬老の日という全国共通の物日が制定されるはるか以前から、長寿のお祝いはありました。これを「賀寿」といい、奈良時代からあるようです。60歳の還暦に始まり、古希（70歳）、喜寿（77歳）、傘寿（80歳）、米寿（88歳）、卒寿（90歳）、白寿（99歳）、百寿（ももじゅ;100歳）、茶寿（108歳）、珍寿（110歳以上）、皇寿/敬寿（111歳）と続きます。

また、最近では、これらの伝統的なお祝いに加えて（社）日本百貨店協会が自らを祝う新しい賀寿として、「緑寿（65歳）」を提唱しているようです。今の65歳はまだまだお元気であることから、イメージカラーも若さと活力を象徴した緑色にしています。

また、古くには9月15日が敬老の日になった理由が諸説あります。ここではそのひとつである「聖徳太子説」をご紹介します。

593年、聖徳太子は現在の大阪市に四天王寺を建てました。この頃に聖徳太子は四箇院を設置したと言われていて、そのうちの悲田院は、身よりのない老人や病人を救うための施設で、今という老人ホームのようなものでした。元々中国にあったもので、中国文化に熱心だった聖徳太子が、「一流の国家は福祉も一流でなければならない」という理想のもと設立しました。この悲田院が誕生したのが9月15日であったため、この日が敬老の日選ばれました。

敬老の日にお勧めの花

日本ならではの伝統を大切に、年を重ねた祖父母へ健康と長寿、そして尊敬、感謝の念を込めてお花を贈りましょう。最近では人生

50年と言われた頃と異なり、体も気持ちも若い澆刺としたご年配の方が多く、おしゃれで明るい色のものをお勧めします。

バラ

こんなときこそ華やかにあえてバラを贈ってみてはいかがでしょうか。賀寿によって色を変えるのであれば、還暦は赤、緑寿はグリーン、古希は紫、傘寿は金茶がイメージカラーです。

ケイトウ

秋の代表的な花。花言葉は「おしゃれ」「不老不死」などがあります。いつまでも若々しくおしゃれでいてほしいという願いを込めて、敬老の日にはプレゼントする方が多いようです。



アキロアジサイ

シックな色合いが美しいアキロアジサイもこの時期とても人気です。切花として飾った後は、ドライフラワーとしても楽しめます。「いつまでも美しく咲き続ける」アジサイは老若男女問わずどなたにもお勧めです。



トルコギキョウ

こちらも出荷期のピークを迎えます。落ち着いた色合いのトルコギキョウは高級感がありエレガントな雰囲気を作り出します。花言葉も「優美」「希望」「清々しい美しさ」など素敵な言葉ばかりです。

ニオイザクラ

敬老の日の時期に多く出回ることから、敬老の日ギフトとして人気があります。とても可愛い花姿と優しい花色、爽やかな芳香が特徴で、心を穏やかに落ち着かせてくれる鉢物です。花言葉は「しとやか」「優雅な人」。

ペゴニア

風や雨にも強く、直射日光にも耐える丈夫なので育てやすく、手入れも簡単な鉢物です。花色も豊富。やさしい色、元気な色、縁起良く紅と白など、プレゼントを贈る方の雰囲気に合わせて色を選んでみてはいかがでしょうか。

その他おすすめの鉢物

デンマークカクタス、コスモス、ブーゲンビリア、カランコエなど

2010年 大田市場花き部卸協同組合 青年部



中秋の名月/お月見



旧暦の8月15日、現在の9月18日前後はちょうど満月にあたり、「十五夜」と呼びます。また、十五夜から1ヶ月後の旧暦9月13日に行うお月見を十三夜といいます。現在は太陽暦なので、満月の夜はその年によって異なります。

十五夜

月の満ち欠けを基準とする旧暦では15日は必ず満月になります。そのことから十五夜と呼ばれるようになりました。旧暦では7月を初秋、8月を中秋、9月を晩秋としていましたが、暑い夏からすっかり秋になり、夜気が済むこの時期に見る満月はまた格別なものとして愛でていました。

十五夜の月を觀賞する習慣は、中国の「仲秋節」という大きな年中行事が平安時代に日本に伝わったことに始まります。十五夜の日には、貴族たちが宴を開いたり、船に乗ったりして満月を楽しむ船遊びをしたり、月を見て詩歌を詠んだりして楽しみました。月を直接見るだけでなく、盃や水面に映る月も楽しんだとも言われます。

やがて一般庶民にも伝わり全国的な民俗へと発展していきました。その行事は農村では豊作を願い、畑でできた秋の収穫物、特に里芋を備えていたことから、「芋名月(いもめいげつ)」ともいわれます。広く一般に浸透してからはお月見には祭壇を作り、月見団子や里芋、枝豆や栗などの収穫物と御酒を供え、ススキを飾るようになりました。

ちなみに、十五夜に雲などで月が見えないことを「無月」、雨が降ることを「雨月」と呼び、たとえ十五夜の月の輪郭が見えなくても、ほんのりとした月の明るい風情を楽しむものとされています。

十三夜

十五夜が「中秋の名月」と呼ばれるのに対し、十三夜は「後の月見」とも呼ばれます。また、この時期は秋の収穫を祝うという意味もあったので、季節の収穫物である大豆や栗などを供えることから、十五夜の「芋名月」に対し、「豆名月」または「栗名月」とも呼ばれます。

十三夜も十五夜と同様重要な行事とされています。十五夜に月見したら、必ず十三夜にも月見するのが習わしで、どちらか一方しか眺めないことを「片見月」と呼び、縁起が良くないものとされました。しかし、最近では十三夜の風習は薄れつつあります。

お月見のお供え

江戸時代には、月見団子や里芋、枝豆や栗に加え、柿や梨、ぶどう、大根などの季節の実りが供えられました。また十五夜の夜は「お月見どろぼう」という風習があり、軒先や玄関、縁側にお供えした月見団子を子どもた

ちが盗み食いをしていきました。お団子はお月様が食べたものとされ、縁起が良く、盗んだものを食べると健康と幸福が訪れると喜ばれたようです。

月見団子の数は、十五夜だから15個とか、1年が12か月だから12個など様々です。

さて、太陽の神様は天照大神に対し、月の神様は月読命(つぐよみのみこと)です。お月見にススキを立てるのは、月神である月読命が降臨する「神の依り代(よりしろ)」としていたからです。これは、豊かな花穂は収穫期を迎えるにあたってその実りを連想させ、豊作を祈ったものであるようです。ススキを立てるのは、江戸時代には関東中心の文化でしたが、今では全国的なことになりました。また、お供えしたススキを家の軒に吊るしておくことで「一年間病気をしない」とするところもあるそうです。

その他にも月を眺めながら日本独特の雰囲気を持つリンドウ、ワレモコウ、ホトギス、コスモス、秋の七草(ハギ、ススキ、ナデシコ、クズ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウ)などをお供えします。また丸い月のようなポンポン咲きのピンポン菊、ダリア、そして秋らしさを感じられる実物、紅葉枝物などを飾るとより一層素敵な晩を演出できます。

中秋の名月にお勧めの花

ススキ
ピンポンマム
シュウメイギク
センニチコウ
フウセントウワタ
カナリアナス
ダリア(ポンポン咲き)
コスモス、チョコレートコスモス
日扇の実
ビバーナムコンバクタ
実バラ、鈴バラ
柿、栗
染めユキヤナギ
紅葉ヒベリカム
紫式部
トクサ
アマランサスなど



2010年 大田市堀花き部仲卸協同組合



秋の彼岸



彼岸とは、サンスクリット語の「波羅蜜多(はらみった)」から来たと言われており、現世をこちら側の岸「此岸(しがん)」というのに対し、悟りや涅槃の境地を「彼岸」といいます。極楽浄土は西方十万億土にあると言われ、春分の日と秋分の日が真東から出た太陽が真西に沈み、現世が仏の世界に最も近づく日とされています。

この日に先祖供養とすると、魂が迷わず極楽浄土に行けると考えられたのです。この日は1日のうちで昼と夜の長さがほぼ同じになります。この日を挟んだ前後7日間が「彼岸」で、秋分の日を中心とした彼岸が秋の彼岸です。

秋分の日天文計算上では、2011年までは毎年9月23日、その後2044年までは閏年に限り9月22日になり、平年は9月23日と計算されているようです。このように天文学に基づいて祝日が決定されることは世界的に見ても珍しいことだそうです。

秋の彼岸には、寺院では彼岸会という法要が行われ、読経や説法が行われます。また、各家庭でも祖先を敬い、おはぎや団子を仏壇に供えたり、墓参りをしたりします。春の彼岸には豊作を祈りますが、秋の彼岸は収穫を前に感謝の気持ちを込めて先祖を祀ります。これはその発端が6世紀ごろと言われ、日本独自の民俗行事です。

これほどまで古い起源を持つ行事が、なぜ今も尚廃れずに人々の生活の中に浸透しているのでしょうか。恐らくそれは農耕民族の日本人が、仏教行事だけでなく、太陽を崇め、自然に宿る八百万の神様や祖先に豊作を祈るといった神仏習合を生活に取り入れた例なのかもしれません。こうして自然と調和していくことにより、自然の移り変わりを観察し、農業の運期を肌で感じていたのでしょう。

ちなみに、秋の彼岸にはお萩、団子、五目寿司などを作り、仏壇や墓前に供えます。春のお彼岸にはお萩の代わりに牡丹餅を供えますが、牡丹餅は春に咲くボタンに似せて丸く大きめに作り、お萩は秋の七草であるハギに似せて小ぶりで長めに作られます。

彼岸花

彼岸花は、秋の彼岸が近くなると開花するために「彼岸花」と呼ばれます。別名として曼珠沙華というのは有名ですが、この名前は仏教名で、仏教では天上に咲くという架空の花とされています。

そのほかの別名として死人花、地獄花、幽霊花、刺刀花、捨子花、はっかけばあなどと呼ばれることもあり、日本では不吉な花として嫌われることもあります。

彼岸花を採ってはいけなと言われるのは、球根部分にリコリン

と呼ばれる毒を含んでいてグラヤネズミがあぜ道や土手に穴を開けるのを防ぐため、或いは、動物によってお墓が掘り起こされることのないように、土手やお墓に植えられました。1輪でも華やかさと優美さを持つ彼岸花は群生していても庄巻の美しさを放ち、見る人を魅了します。



また、欧米では数多くの園芸品種が開発され、韓国では花と葉が同時に生えることがないため「葉は花を思い、花は葉を思う」として「相思華」と呼ばれるそうです。

ちなみに学名は *Lycoris radiata* (リコリス ラディアータ)。リコリスはギリシャ神話の海の精である「リコリアス」の名前から取られました。ちなみに、意外かもしれませんがヒガンバナ科の花は、ほかにアマリリス、クンシラン、スイセン、ネリネ、ダイヤモンドリリー、ユーチャリスなどがあります。

秋の彼岸にお勧めの花

グラジオラス
リンドウ
テッポウユリ
センニチコウ
リヤトリス
ケイトウ
スプレーマム
輪ギク
ネリネ、リコリス
スターチスなど

